



KWANSEI  
GAKUIN  
UNIVERSITY

Supported by  
 日本  
財団  
THE NIPPON  
FOUNDATION

# 手話言語研究センター講話会

---

2017年7月23日開催

関西学院大学手話言語研究センター

## 目 次

総合司会 オストハイダ テーヤ（関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター研究員）

開会の辞..... 2

松岡 克尚（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員）

### 第一部「近代聾史について知ろう」

講演 新谷 嘉浩（近畿聾史研究グループ代表） ..... 4

対談 新谷 嘉浩.....14

今西 祐介（関西学院大学総合政策学部助教／手話言語研究センター研究員）

第二部「日本手話を楽しもう」 .....20

講師 小北 悦子（元関西学院大学非常勤講師／関西日本手話研究会）

閉会の辞.....22

山本 雅代（関西学院大学国際学部教授／手話言語研究センター長）

登壇者紹介 .....24

## 開会の辞

松岡 克尚

○松岡 皆様、こんにちは。

関西学院大学手話言語研究センターの研究員をしております松岡と申します。よろしく申し上げます。

本日は、多くの方にお集まりいただき心から御礼申し上げます。

私ども関西学院大学手話言語研究センターは、年に二回、関西と東京でそれぞれ一回ずつ講話会を開催しております。この講話会では、手話言語学にまつわる様々なトピックを取り上げ、その道の第一人者の方をお招きし御講演いただいております。

こうした第一人者からのお話しに加えて、日本手話をこれから学びたいという初心者の方を対象に、ワークショップも併せて開催してまいりました。

昨年度の講話会では、手話の音楽表現を取り扱った映画を紹介し、その映画を制作された監督と、音楽学の研究者の先生とで手話と音楽に関して対談をしていただくというを行いました。それによって、手話が単なるコミュニケーションの手段にとどまらず、芸術とも関連させることができる、単なるコミュニケーション手段、言語という存在を超える可能性があるということを学ばせていただきました。

手話言語研究センターという組織の名称から、言語学のアプローチはしないのかと思われる方もいらっしゃるかもしれません。もちろん手話言語学を発展させていくことが、私どものセンターの大きな目的になっています。しかし、言語は社会的なものであり、同時に文化的なものでもあります。当然に、そこには芸術的な要素も含まれています。その良い例として文学を挙げることができます。文字を使った言語による文学があれば、手話による文学も可能かも知れないと思うと、興味は尽きません。

このように、この講話会では手話に対して、単に言語学的な接近のみではなく、多角的なアプローチで迫っていくことを大事にしています。様々な観点から手話を切り取って、新たな発見やアイデアを皆様と共有していきたいと思っています。

そういった趣旨で開催される講話会ですが、今年度は、歴史的なアプローチから日本手話を切り込んでいこうと思っています。日本手話とはいつの時代に生まれたものなのか、どうやって形成されていったのか、おそらく誰もが思う疑問であり、それは日本手話のルーツにかかわる問題です。本日はそれらをじっくり学んでいきたいと思っ

ています。

では本日の素晴らしい講師を御紹介いたします。新谷嘉浩先生です。新谷先生は「近畿聾史研究グループ」の代表をされており、日本の歴史の中で、ろう者がどう描かれてきたのかを研究されています。

最近では、「障害学会」という学会の学会誌『障害学研究』の中で、「非人施行における障害者表象及び聾啞表象」という、「豊国祭礼図屏風」にろう者の方がどう描かれているかという研究の論文を末森氏と高橋氏の連名で発表されています。

ろうの方、聞こえない方を絵で描いても、聞こえる人と区別がつかないと思います。それをどう区別付けて、昔の時代では描き分けられていたかというのは、なかなか興味深い内容だと思います。先生の論文では、江戸時代の初期に描かれた屏風絵に、ろう者の方が描かれている可能性、そこから当時の時代において社会がろうの方をどう見てきたか、どう見ていたのかを論じられています。関心のある方は論文の方もぜひご覧いただけたらと思います。このような、ろう者についての歴史研究の第一人者である新谷先生から、本日は近代聾史について、色々教えていただくことになります。日本の聾史について、私たちが知らなかったことについても多く学ばせてもらうことができるのではないかと考えています。

その後、新谷先生と、当センターの研究員であります今西祐介との対談を予定しております。

新谷先生の御講演を聞かれた皆様の受けとめ方は多分様々だと思いますが、今西研究員との対談を通して、皆様の御理解の整理、新しい発見に繋がっていけばと思っています。

そして今回も、日本手話の初心者の方を対象としましたワークショップを開催することにしております。こちらは関西学院大学教育学部で、「日本手話」のクラスを担当されていた小北悦子先生の御協力をいただくことができました。音声言語とは異なる手話という言語を楽しみながら、その基礎を学んでいただければと思います。

本日のメニューはこのように、手話の歴史的なアプローチと初心者向けのワークショップの二本立てになります。どうか最後まで楽しみながら学んでいただくことを願い、開会の挨拶とさせていただきます。

御清聴ありがとうございました。

## 【第一部】講演「近代聾史について知ろう」

講師：新谷 嘉浩

○オストハイダ 私は関西学院大学のオストハイダ テーヤと申します。本日は司会を務めさせていただきます。

先程、御紹介がありました。本日は新谷嘉浩先生に、「近代聾史について知ろう」というテーマでお話いただきます。

新谷先生は京都府生まれで、京都府立聾学校の幼稚部を経て、京都市内の小学校、中学校の難聴学級に就学されました。その後、京都市内の一般の高等学校に通われ、日本福祉大学を御卒業なさいました。御卒業後は、会社勤務の傍ら、ライフワークとしてろう者の歴史研究に取り組んでこられました。その研究が素晴らしいということで、現在は「近畿聾史研究グループ」の代表も務めていらっしゃいます。また、京都市聴覚障害者協会上京支部の事務局にも携わっていらっしゃるなど、色々な御活躍をされています。

早速、新谷先生に御講演をお願いしたいと思います。よろしくお願いたします。

○新谷 皆様、こんにちは。新谷嘉浩と申します。

本日は、「近代聾史について知ろう」というテーマで、手話の起源や日本手話がどのようにして生まれたのかなどについて、色々とお聞きしたことからお話しようと思っています。最近、驚いたことからお話しいたします。昨年、京都市で「手話言語条例」が制定されて、非常に素晴らしいことだと思っています。現在の京都府立聾学校の校長先生にお会いする機会があり、手話条例ができてよかったという話をしました。

しかし、その京都市の手話言語条例文のなかで少しひっかかったことがある、とおっしゃるのです。何かと聞きますと、全国で初めてろう学校ができたのは京都で、これは間違いなことですが、手話をつくったのも京都府立聾学校であるようなことが明記されており、「公のものとして書かれてしまった以上、もはや反論の余地はないけれど、これは非常にためらいを感じる。」とおっしゃっていました。私も同感です。

本日私は、これまで様々な史料を読み研究してきた内容を、皆様に御紹介したいと思っています。少し問題提起の部分も入るかもしれませんが、どうぞよろしくお願いたします。

先程、司会の方から御紹介いただきましたとおり、私は、京都の北部にある京都府立

聾学校の舞鶴分校に入学し、その後、京都市内に引っ越しまして、普通の小・中学校の難聴学級で学びました。中学卒業後は、普通学校の高等学校に入学しまして、その後、2年浪人生活をした後、愛知県にあります日本福祉大学に入学しました。

それまで、私はずっと音声でコミュニケーションをとっていたのですが、大学に入ってから手話に目覚め習得しました。当時大学の中にも手話サークルがありましたが、ほとんどは聞こえる学生です。しかし、地域の手話サークルには、ろうの方、特に高齢で非常に魅力のある手話をされる、ろうの方がたくさんおられましたので、そういう方から手話を学んで習得しました。

現在、近畿聾史研究グループの代表を務めさせていただいておりますが、代表といいますが、そんなに立派なものではなく、この研究グループは皆が平等に活動しているのですが、誰か代表を置かないといけないということで、私が代表を務めているまでです。

この研究グループについて簡単に御紹介させていただきます。平成9年11月14日に結成いたしました。主に近畿地区、大阪、京都、奈良、滋賀、兵庫に在住するろう者が中心となって活動しているグループです。聴者も若干います。ただ、大学教員のような専門知識を持った者はおらず、メンバー皆で集まって研究を積み重ねているグループです。研究成果については、色々とところで発表をさせていただいております。

また、『聾史レポート集』を出版しました。それ以外にも、昔、グラハム・ベルが来日した際の、東京、京都の講演記録を写真で撮り、文字起こしをしたものを、『ベル来日講演録 - 東京・京都 -』、という本にして出版いたしました。明治時代の文章なので、理解するのが大変難しく、何度も何度も校正を重ねました。更に、ミラノ会議（第二回世界ろう教育者会議）の記録も京都府立聾学校に残っていたので、それを学校からお借りして、写真を撮り文字起こしし、まとめたものも出版しております。それが、『万国聾啞教育会議報告』です。これらは販売しておりますので、もし、御興味のある方がおられましたら、私に声をおかけください。

では本題に入ります。明治時代から、聾啞学校創設の歴史について、時系列でお話しさせていただきます。日本で初めて聾学校ができましたのは京都です。続いて大阪に、大阪模範盲啞学校ができましたが、こちらは明治13年に廃校、同年に私立として再校されましたが、明治25年に廃校になっています。現在の大阪府立中央聴覚支援学校は、明治33年にできた私立大阪盲啞院であり、大阪模範盲啞学校とは別のものです。

さて、こちらの三人が写っている写真（スライド）をご覧ください。

皆様、この三人の中で御存知の方はいらっしゃいますか。この写真は明治39年に、日本聾啞教育講演会が東京で開催された時に撮影されたものです。右側の方は、京都市立盲啞院の院長であった鳥居嘉三郎、左側の方は、官立東京盲啞学校の校長であった小西信八、そして真ん中の方は、私立大阪盲啞院の院長であった古河太四郎です。

この古河太四郎にはサインネームがありまして、お酒を飲むとよく額を叩く癖があったことから、顎と額をたたき「お酒」という手話を用いて表したり、他に、非常に痩せていたので、「痩せている」「男」などの手話で表す年輩の方もおられます。

古河先生は非常に有名な方なので御存知の方も多いと思います。特に、手話は古河先生が発明したものと思われていますが、ここで大きな問題提起をさせていただきたいと思います。本当に今日の日本手話を発明したのは古河先生なのでしょうか。

まず、そのお話をする前に、先生の生い立ちから御紹介したいと思います。京都市で「白景堂」という、約300人の子供たちに対して寺子屋を営む父親の四番目の息子として生まれました。古河は神童と呼ばれるほど利発で、6、7歳頃から、父親が教師をしていることもあって、生徒の指導に当たっていました。やがて、明治維新とともに、日本各地にあった寺子屋が小学校、中学校に変わっていきます。

その古河の家の近くに、上京第一九区学校、現在の待賢小学校がありました。ただ、この待賢小学校も、最近は隣の小学校と併合し閉校しましたが、建物自体はまだありますので、ご興味がある方は足を運んでください。古河はそこで算術の教師を務めました。

明治6年に、古河はあることがきっかけで聾啞児と知り合い、ろう教育に携わるようになります。やがて当時の文部省の九鬼という役人が京都に来た時、古河の聾啞児に対する指導の様子を見て記録に残すことを勧めます。その後古河は、文部省からの依頼を受けて、聾啞児の指導の成果などを執筆し発行しました。これは『文部省雑誌』で報告されています。

この雑誌には、それまで、外国での教育指導の成果などがたくさん載せられていたものの、日本のろう教育実践や方法について掲載されることはありませんでした。従って、これが初めての日本のろう教育成果としてその雑誌の付録に記載されたものとなり、それがきっかけで、教育者の間で古河という名前が一気に知れ渡ることとなります。

その後、明治11年5月に京都に仮盲啞院（現在の京都府立聾学校）が開校されましたが、後の明治19年に院の経営が非常に苦しくなってきます。この時文部省は、古河に京都盲啞院の院長と、文部省管轄の東京盲啞院の教師を兼ねさせることで財政的な支援をしました。明治22年に、古河は依願退職をしますが、実質的には解雇という形となりました。

解雇された後は、美術の工芸品などを鑑定するような仕事に携わったり、日本生命会社から講演依頼があると、各地を回るような仕事をしますが、ほぼ家にいて、ろう教育からは一旦離れました。

そのような古河に大きな変化をもたらしたのが、明治31年、グラハム・ベルとの出会いです。電話を発明したあのベルです。有名な人ですが、アメリカのろう者の間ではあまりいい評判を聞きません。彼は日本に來日し、まずは東京で講演をし、続いて京都で講演をしました。その時に、ぜひ古河と会いたいというので盲啞院に來たのですが、その時、古河は不在でした。それでもベルは、古河に会いたいという強い希望があって、古河を家から呼び出してもらい、とうとう会うことができました。ベルは古河に会えて非常に感動し、抱擁までしたとされています。

表舞台から遠ざかってかなり時間がたっていたので、周りの人は古河のことをそんなに有名人だとは思っていませんでした。しかし、その古河にベルがわざわざ会いにきたということで、ろう教育者として再評価を受けることになったのです。そして明治33年、私立大阪盲啞院が開校となるにあたり、ろう教育に関するノウハウを持ったものがいなかったため、盲人五代五兵衛が古河を大阪盲啞院の院長として招聘しました。当時は、ろう児や盲児の教育だけでなく、縫製や木工などの授産施設も併設していました。その授産施設はなくなり、現在は大阪府立中央聴覚支援学校となっています。

そして明治39年に開かれた日本聾啞教育講演会で、古河は小西信八と鳥居嘉三郎と出会い、撮ったのが先程の写真です。当時、ろう児と盲児は同じ教室で勉強をしていたのですが、指導方法がそれぞれ異なるため、学校を別にした方が良いという意見が合い、三人は文部省に訴えたそうです。

その後古河は、大阪市に移管された「市立大阪盲啞学校」の院長に就任しましたが、同年、残念ながら、心臓を患い亡くなりました。これが古河太四郎の生涯です。

続いて、古河自身が手話を考案したのかということについてです。そもそもどのようにしてろう者と出会うことになったのかを御紹介しましょう。

先程、明治6年に古河がろう児と出会ったとお伝えしました。それが山口姉弟という二人のろう児なのですが、この山口姉弟の家の近くに魚屋さんがありまして、そこの息子もろう児でした。山川為次郎といいますが、この三人に古河が会うことになったとされる伝説が二つあります。

一つ目の伝説は、熊谷伝兵衛との出会いです。熊谷は、京都盲啞院設立に関してとても大事な方です。熊谷の家は砂糖商を営んでいたのですが、その隣に傘をつくる店があり、それが先程のろう児、山口姉弟の家だったのです。熊谷はいつも、山口姉弟宅に、同じくろう児である山川為次郎が遊びに来ている様子を見ていました。近くには、先程お伝えした待賢小学校がありました。聞こえる子は学校に通っているのに、この三人は、学校に行っても先生の話している内容が全くわからないので、家に引きこもっている状況を知った熊谷は、ろうの子供たちに色々工夫をこらしながら勉強を教えました。

例えば、物を指して「机」「コップ」「飲む」などの簡単な言葉を教えていました。しかし、熊谷は教育の専門家ではなかったので、近くの待賢小学校に、このろう児三人への教育をお願いしにいきました。そこに算術教師として勤めていた古河がいたわけです。最初、古河はこれを断ったそうです。しかし熊谷は諦めず何度も何度も古河を説得し、ようやく古河が引き受けてくれたという経緯があります。もし熊谷がこの三人のろう児と出会わなければ、ろう学校ができることもなかっただろうと言われていきます。

次に二つ目の伝説についてです。皆様は、窮民授産所を御存知でしょうか。明治初期、京都の町には貧困者が多くいました。地方の農村がなくなり、貧困で苦しむ人たちが京都市内に集まり、仕事がないまま、町で暮らしていたのです。同じ頃、小学校の教師をしていた古河は、京都の山奥で雨不足、水不足でなかなか農業ができず困っている人たちから助けてほしいと依頼を受けます。古河は、まず池を造ろうと考えましたが、造るにはどうしても政府の許可が必要になります。その申請に不備があったということで、千本牢獄に明治3年から二年間幽閉されてしまいました。現在、千本牢獄はありません。

その千本牢獄に、貧困者に就労技術を身につけるための教育施設がありました。それが窮民授産所です。そこで古河は手まねで会話している人たちに出会います。つまり古河は、熊谷が連れてきたろう児三人と会う前に、窮民授産所で手まねと触れ合っ

ていたというのが、この二つ目の伝説です。

古河は明治6年、熊谷がつれてきたろう児三人への教育を始めました。その後、先程も申しましたように、文部省から依頼を受け、『教育雑誌』にこの指導についての記録を残しました。これが全国で初めての聴覚障害教育の記録になります。この中で、古河は「手話」という言葉は使わず、「手勢（しゅせい・しかた）」という言葉を使っています。

「手勢」という言葉は古河が作ったのかというと、私は違うと思います。「手勢」はもともと中国の言葉です。この「手勢」という言葉を翻訳すると「手ぶり」になります。

古河の記録には、「手勢法は、ろう者同士の会話に注目をして、その意味をくみ取り、日本語と結びつけていく。」と書かれています。つまり、古河が手話を発明したのではなく、ろう者がもともと自然に会話をしているのを見た古河が、それを日本語に結びつけて、ろう児を教えたということになります。

「示諭手勢」という言葉ですが、『文部省雑誌』にこれはすべて記載されています。例えば、方角をあらわす手勢「東」、「山」、「日」、「西」、この4つで例をお示しします。

「山」はこう表します。(手話)

「日」はこう表します。(手話)

そして「山」を表し、「日」を上動かして、指で右方向をさすと「東」、「日」を下動かして、指で左方向をさすと「西」になります。「書取（かきとり）」という勉強法があって、例えば、古河が「山」という身ぶりをすると、ろう児が「山」という漢字を書く。次に「日」を下動かすと、「西」と書く。つまり手勢を理解して日本語を学習する方法、示諭手勢で勉強を教えていました。

いわゆる身ぶりで表したものを、日本語として学んでいくという方法ですが、他にもたくさんあります。例えば「父母」、「父」、「母」などがあります。

「父」を表す時は、まず黒板に名前を書き、その生徒を指して、次に「男性」という手話を表します。

この「男性」という手話は、明治時代は、「親」という意味でした。今でいう「女性」という手話は「子供」という意味でした。

次に「母」は、同じく黒板に名前を書き、その生徒を指して、次に胸の形を表し赤ん坊を抱く仕草で表します。それを見て子供は日本語で「母」と書き取るという方法

を使って勉強をしていました。これが今の手話のもとになっているかどうかは疑問です。

次に「談話応接法」と「綴語作文法」、この二つについて説明をいたします。

「談話応接法」は、まず日本語の文章を書いて、それを子供に表現させる方法です。

二つ目の「綴語作文法」はその逆で、まず手勢の表現があって、それを日本語の文章で書く、という方法です。これらの方法を用いて古河はろうの子供達に勉強を教えていました。

続いて、助詞にも一つ一つ手の形が決まっていて手勢と組み合わせて文章を表していました。

また、現在の指文字のような「五十音手勢」が当時もあり、高学年（及び大人の哑者）用と低学年（及び聴者）用の二種類がありました。

明治11年に開校された京都盲哑院では、先生が書いた日本語を見て、ろう児が、この「五十音手勢」を表し、周囲をびっくりさせたと言われています。そして見学に訪れた人々に、ろう児の「五十音手勢」がわからないため、この表を配ったそうです。

古河が用いた「手勢」が現在の手話の起源かと言うと、私はそうではないと思います。つまり、古河は日本語を教える手段として「手勢」といった身振りを活用しながら指導していったのではないかと考えます。つまり、身振りや指文字などを用い日本語を教えたというのが古河である、と私は考えています。

では、今の手話の起源はどこからか、と言うと、東京盲哑学校ではないかと思えます。「手話（しゅわ）」は明治時代、「日本語を手で話す」ということから、「手（て）ばなし」という読み方をしていました。

その「手ばなし」は教育のために使われ、ろう者が普段手話を使って会話をするものは、「手まね」と呼ばれていました。京都でも高齢の方は、手話のことを「手まね」という言い方をします。つまり、日本語をもとに手で話すものは「手ばなし」、ろう者が自然に話すものは「手まね」と言われていたのではないかと思えます。

古河は、ろう児が自然に普段の生活で使う、いわゆる「手まね」を認めず、「手勢」をよしとしていました。大阪に盲哑院ができた後の、明治35～36年頃の史料に、古河は、自分が指導した以外の手勢を使わせることを禁じた、という記録が残っています。

それに対して、鳥居と小西は子供たちが使う手勢、「手まね」は自然なことだと、それを尊重していました。ですので、鳥居がいた京都盲哑院では、日本語と身ぶりを学

びながら、子供たちは独自で色々な要素を取り入れながら、手話をどんどん発展させていきました。これは小西がいた東京盲啞学校も同様です。

明治36年に、東京盲啞学校に教員練習科が誕生します。これはろう教育の先生を養成するために設立されたコースです。聞こえる人も聞こえない人もこのコースを受けながら手話を学びます。そして卒業後それぞれの地域に戻り、そこで手話がどんどん広がっていきました。

つまり、全国に手話が広まったきっかけは、実は東京が発祥なのではないかと私は思っています。例えば、京都のろう学校を卒業した先生が指導に行った山口県と長崎県では、京都の手話が若干残っています。以前、長崎県を訪問した時、昔、京都で使われていた数字表現を、高齢のろうの方が表していることを知りました。他には、例えば「放課後」という手話ですが、長崎では京都の手話の「6」と「下」を使っていました。つまり、京都の手話に影響を受けているということが分かります。また、山口県でも京都で使われていた手字法が残っています。このように京都の手話に影響を受けた地域もあるのですが、実は圧倒的に東京の影響を受けた地域のほうが多いのではないかと考えています。

古河が、手まねで会話をしている姿を見た、というろう者の中には無就学、つまりろう学校に通ったことがない集団もいました。古河が盲啞院で教育を施した手勢のもととなったのが、その無就学のろう者が使う手まねだったようです。近畿聾史研究グループの研究調査の結果でも、江戸時代に無就学のろう者がいたという史料が数多く見つかっています。

大阪では、お初天神あたりに無就学の啞集団がいたという記録が残っています。このあたりに啞者が営む髪結の店があり、そこに啞者が集まっていたようです。その他には、千日前、今は商店街なっているところですが、そこにある楠木神社の道路を挟んだ向かい側に、啞者が営む髪結いのお店がありました。そこでの新聞記事（大阪毎日新聞、明治35年12月5日、「啞の頓死」）について御紹介したいと思います。

この記事には、「啞の夫婦」とはっきり載っています。髪結い店の旦那が、大酒飲みがたたり道で倒れてしまったのですが、彼は大変有名な人でしたので、通行人が奥さんを呼んできました。奥さんは、倒れている旦那に手で話しかけていたと書かれています。実際の新聞記事には、「手まね」という言葉が書かれています。

この大阪千日前の、ろう夫婦の髪結い店の紹介記事は他にもあります。それによると、

この髪結い店の店主、奥さん、弟子全員が「唾」であると書かれています。

また別の新聞では、唾者の喧嘩についての記事が残っています。睨み合っている唾者のところに、この新聞では「聾(つんぼ)」と書かれています。難聴の人が仲裁に入ったという記事が残っています。その他にも、ろう者のことについて書かれた新聞記事がたくさんあり、それらを表にまとめました。

江戸時代、髪結いをしてもらえるのは男性のみで、女性は認められず自分ですることが常識だとされていました。

皆様、「まげ」を御存知でしょうか。明治4年に「断髪令」が施行され、男性も女性も断髪ができるようになりました。しかし、「断髪令」施行後、女性の髪がどんどん短くなっていき、これはみっともないということで、女性に断髪禁止令が下されたのです。その結果、女性も髪結いをしてもらうことが認められ、女性専門の髪結い店ができるようになりました。

ろう者が髪結いの仕事に就いていた理由については諸説あります。まず、たまたま親が髪結い業を営んでおり、跡を継がせたという説です。これは、ろう者を自立させるために、そういう場を提供したということにもなります。

他には、ろう者が営む床屋に修行に行き、そこで技術を身につけたという説や、聴者の床屋で技術を身につけた説、こちらは史料が残っております。

先程、髪結店の唾夫婦の話をしました。日本初のろう者同士の結婚についてお話しします。吉川金造といい、東京聾唾学校を卒業後、豊橋盲唾学校教員となりました。その時、同じ東京聾唾学校の卒業生であった、ろうの女性と結婚をしました。これが日本で初めてのろう者同士の結婚と言われていますが、正確には、ろう学校で教育を受けた同士で、ろう者同士による結婚が初めてとなります。実際には、無就学のろう者同士で、吉川夫婦よりも前に結婚された方が存在していたことが判明しています。結婚時期は不明ですが、ろう者同士の結婚として記録に残っています。

先程の千日前のろう夫婦は、普段の会話も喧嘩も、全部手まねで行っていたと記されています。

また別の、日本橋筋に住んでいたろう夫婦の場合は、結婚した頃は指で字を記していたと書かれています。「手まね」かどうかは定かではありませんが、指で字を描けたということであれば、もしかすると寺子屋等で文字の学習をされたのかもしれないと推測されます。

日本で初めてろう学校に理容科が設置されたのは昭和8年の徳島盲聾学校です。先程からお話している髪結業は明治時代のことですから、ろう学校に理容科ができる前に、ろう者は自ら髪結い業や理髪店を経営し、自立していたということがわかります。

さて、この頃の日本のろう者の状況についてお話します。岩田鎌太郎という人は、東京聾学校教員練習科で一年学び、その後、東京市立養育院で聾児に教育を施していました。当時の無就学のろう者の様子を、「盲聾学校に通う聾の子供は文章を習得させるのみで、手に職を付けさせる教育を施していない。対して、無就学のろう者は素晴らしい技術を持っており、収入が高くて驚いた。」と記録に残しています。

もう一人、中垣内久次郎という人は、京都盲聾院の聾教員でした。同じく無就学のろう児について、「全国で多数のろう者が、色々な事情でろう学校に入れずにおり、実際は無就学のろう児のほうが多い。」ということを残しています。当時、聾学校で修学できる聾児は少なかったのです。そして、無就学のろう児は聴者のもとで雇われるわけですが、手まねを使い、又、無就学のために、世間で起きている情勢やニュース等は半分程しか理解できず、犬や猫のような扱いを受け差別されていた、という記録が残されています。つまり、一般社会では聾者に対する扱いがひどかったということが分かります。

最後にまとめに入りたいと思います。古河太四郎が出会ったという、手まねを使って話す無就学の集団がいた、という事実は間違いありません。でもその集団は手まねしかできなかつたため、社会で起こっている情勢などをあまり理解できなかつたのではないかと思います。一方で、盲聾学校に通う聾の子どもたちは、生徒同士、または先生から様々な言葉を学ぶ機会があります。また、聾者同士で自然にコミュニケーションが図られますので、得られる情報が多く、またそれに伴い「手まね」も変化したのではないかと思います。

簡単ではありますが、以上でまとめとしたいと思います。御清聴ありがとうございました。

○オストハイダ 新谷先生、大変参考になるお話をありがとうございました。

## 【第一部】対談「近代聾史について知ろう」

新谷 嘉浩

今西 祐介

○オストハイダ それでは対談のほうに入らせていただきたいと思います。新谷先生と御対談いただくのは、関西学院大学総合政策学部の今西祐介先生です。今西先生は、中米のマヤ諸語や日本の琉球諸語など、いわゆる「消滅危機言語」の記録についての研究をされています。御二人の言語という接点からなる対談を、非常に楽しみにしております。どうぞよろしく申し上げます。

○今西 皆様、こんにちは。只今、御紹介にあずかりました今西祐介と申します。

私は、言語学を専攻しております、音声言語の文法や音などについて研究しています。その中で、たまたま話者数が非常に少ない、あるいはどんどん減ってきている「消滅危機言語」と言われる言語を研究してきました。

今回、対談のお話をいただき、私自身は手話に関しては素人なのですが、「消滅危機言語」という観点から、手話について色々なお話を伺いたいと考えております。そして同時に、その言語がどのようにして生まれたのかということは、どの言語を研究するにしても重要な問題です。ですので、先程、新谷先生にお話いただいた日本手話の歴史のお話は非常に興味深く、その点に関しても音声言語や手話言語と合わせてお話を伺いたいと思っております。

その後、皆様にお書きいただきました「質問票」から、新谷先生に私からお伺いしたいと思います。時間の都合上、全ての質問を抽出することはできないかもしれませんが御了承下さい。

それでは本題に入ります。今回お話しいただいた日本手話の歴史に関して、非常に興味深いものがたくさんありました。特に今回、新谷先生は、色々な史実を詳細に研究されてきた結果、古河太四郎が日本手話の考案者だという定説に対して問題提起をされました。その点が非常に興味深く、特に「手勢」に関する記述で、ろう者の方々は既に言語を持っており、古河氏がそれを聴者の日本語と結びつけ、ろう者に教えたという点が、手話は既に存在していたということの力強い証拠だとおっしゃっていたのが非常に興味深かったです。

このような説は、歴史研究界において広く理解されているのでしょうか。あるいは更

なる議論がなされているのでしょうか。

○新谷 私どもの研究グループでは定説となっておりますが、やはりこれが広く知られているかという点はまだだだと思います。今西先生がおっしゃったように、何か定説をつくるためには確固となる根拠が必要になりますが、その数が非常に少ないのです。しかし、先程スライドでお見せしました、明治11年1月、文部省で出版された『文部省雑誌』を改めて読みますと、分かることがたくさんあります。明治初期に、ろうの集団や未就学の集団があり、古河がそういう方々の手話を見て、それをろう教育に生かしたことは間違いない事実として記載されております。ですが、このような考え方を持っている人は、私ども研究会グループの三、四人です。

又、このような講演会でお話させてもらうだけではなく、論文を書いたり、説明を重ねていき、社会に周知してもらうことが、今後必要とされる取り組みだと思います。特に、ろう者の集団の中で手話が使われていて、それを古河が見たということですが、そのろう者たちは誰なのかという問題が出てきます。

フランスのド・レペという方を御存知でしょうか。フランスでは、ド・レペが手話をつくったと言われていますが、こちらもやはり、当時パリにいたろうの集団の中での会話をド・レペが見て、フランス語を教えるために手話を使ったろう教育を編み出したと言われております。つまりそういう背景となるものは日本もフランスも同じなのです。

京都でも、実際どこにろうの集団があったのか、これは今後の研究の課題になってきます。

古河は、明治13、14年頃、京都の町中の木工店や染物屋など色々なお店に、調査に回ったという記録が残っています。店にろう者がいるかどうか、いるとしたら、どんな仕事をしていて、給料はいくらぐらい貰っているかなどを調査したと記されています。

つまり古河のその行動から、そのあたりに実際ろうの集団があったと推測できますので、今後、研究を進めていきたいと思っています。大阪の場合は、髪結い業においてろう者の集団があったと、たまたま紙面でしっかりと残っておりました。もちろん、ろう者が集まればその中で手話というコミュニケーション手段が生まれ、集団が形成されたと思うのですが、集団化されたのは明治以降か、以前かは私にも分かりません。なんせ、それに関する史料がもう残っておりませんので、今は手探りの状況です。

○今西 今のお話も非常に興味深く伺っておりました。言語学については色々な考えがありますが、一つの考えとして、誰か個人が言葉をつくるということはありません。言語学の中にも有名な、中米のニカラグア手話の話を、今、思い浮かべたのですが、つまり、手話がなかったところに、ホームサイナーというか、家で手まねのようなものを学んだ子供たちが一つの集団に入った時点で、言語の一つ前のステージのような状態の言語が生まれ、それがまた次の世代に伝わっていくというようにして、誰か個人がつくるというよりは、ろう者、あるいは言語を話す方々が集まったところで、一つの言語が自然発生的に生まれる、という話と非常に合致するなと思っておりました。

本日のお話の中で、現在の日本手話との歴史的関連ということで、「東京盲啞学校」「手ばなし」について、先程は時間が押してあまりお聞きできなかったのですが、ここでもう少し詳しくお伺いしたいと思います。これらに関してどういった事実や史料をご覧になったのかをお伺いできますでしょうか。

○新谷 明治33年鹿児島聾学校を設立した佐土原スエさんという女性の方が、手ばなし法についての本を出版したという記録が残っております。佐土原さんは東京盲啞学校で一年間、手話の指導方法を習得したのですが、その際、当時ホテルなどありませんので、ろう学校の寄宿舎に泊まっておりました。そこでろうの子供たちと接しながら、彼女は手話を習得し、鹿児島に持ち帰り、この手ばなし法の本を書いたのではないかと思います。つまりこのことから、東京盲啞学校では手話がすでに発展していたのではないかと考えています。

それと、吉川金造夫婦の紹介もさせていただきましたが、この夫婦も東京盲啞学校で学んだ後、豊橋聾学校で教鞭をとっていました。明治42年頃に、大阪朝日新聞から取材を受けた記録が残っています。当時、手話通訳はいませんでしたので、取材は筆談でやりとりをしたと載っています。そして、ろうの子供たちを集め、吉川金造が、黒板に板書をしたり、手話も用いたりして、記者の紹介をしたということです。

その時に用いたものを、「手ばなし」と言っているのですが、「手ばなし」に関してできた手話としましては、「名古屋」の手話は城のシャチホコを模したり、「大阪」の手話は、豊臣秀吉が暮らした場所ということで、豊臣の兜を模したという記録が残っています。その他、お相撲さんが四股を踏む様子から「元気」、胸毛を引っこ抜く様子から「くやしい」などの手話ができたと新聞に載っているのを読み大変驚きました。

ろう夫婦同士の会話は「手まね」、学校で教えるのは「手ばなし」と、使い分けて書かれていました。これらのことから、東京盲啞学校では、すでに手話のようなものが確立されていたのではないかと考えられます。

○今西 あともう1点、「消滅危機言語」という観点から伺いたいと思います。消滅危機言語をどのように定義するかは、研究者によって非常に分かれるところです。例えば、ユネスコは、話者数が100万人を切ると危機言語になる恐れがあると、色々な研究をもとに言っています。皆様も、インターネットで「ユネスコ」「危機言語」という言葉で調べていただくと、2009年あたりの危機言語の世界地図を見ることができます。日本をクリックすると、8つの危機言語があると発表しています。その中にアイヌ語や琉球語がありますが、これらは方言ではなくて言語に分類されています。あまりきちんとした記録がないので、琉球語にしてもどれくらいの話者数があるかわからないのですが、ある一説によると琉球語は多く見積もっても20万人ぐらいではないかと言われています。

日本手話がどういう状況かも調べてみました。日本手話自体はユネスコの地図には載っていないのですが、「エスノログ」という、アメリカでキリスト教をベースにしたNPOがつくっているデータベースがあります。世界の言語の話者数や、色々な文法的な特徴を書いたサイトなのですが、そこに日本手話に関して1つのエントリーがありました。そちらによると日本手話の話者数は約30万人ということでした。

ユネスコ発表の、日本の危機言語8つの中でも、話者数が多いと思われる琉球語は約20万人、対して日本手話は約30万人ということで、危機言語の中では話者数は多いほうだと思いますが、ユネスコの基準からいくとどんどん消えていくリスクが高いほうに分類されると思います。

実際、今まで見てきたどの消滅危機言語においても、復興させるということにおいては、歴史的な研究、言語学的な研究、あるいは文化的な研究、そういったものの蓄積が非常に大事だと感じてきました。今回、新谷先生のお話を伺っていると、日本手話の歴史的な研究を非常に詳細にされており、そういったことは今後の言語の復興、あるいは普及させていく上で非常に重要だと思います。歴史的な研究を進めるに当たって、色々な史料が必要だと思うのですが、史料集めなどに関する苦勞、又は、どのようにして史料を集めておられるのか、その辺りをお伺いしたいと思います。

○新谷 まず、一番必要とされるのは広い視点で研究にかかわることです。非常に固執し

たり、聾史だけに絞ってしまうと、どうしても資料を集めるのが困難になってきます。最近では、例えば、盲人に関する史料を一緒に集めて調査をしています。戦前、盲とろうは一緒の学校でした。なぜかはわかりませんが、ろうに比べたら盲のほうが膨大な史料があるので、そちらから見ようと思いました。盲教育の歴史について研究している人は全国に大勢いらっしゃるのですが、彼らと情報交換などをしていきますと、意外な新しい発見があったりします。それともう一つ大切なことは、得た情報を公開することだと思っています。

中には、自分で見つけた非常に大切な史料をなかなか外に出さない方もいらっしゃいます。逆に私自身は、自分の研究で発見したことを公開するようにしています。自分で集めた情報をきちんと論文としてまとめたり、今回のような講演をするなど、何らかの形にして世間に公表することの積み重ねが大切ではないかと思っております。本当に大変ですけれどもね。

○今西 貴重な研究をされておられますね。ありがとうございます。

ではここからは、会場の皆様から頂戴しました質問を幾つかピックアップさせていただいて、新谷先生に伺いたいと思います。

一つ目は、明治時代、東京盲啞学校の教員練習科で学んだ人たちは、どのような背景を持った方々だったのでしょうかという御質問です。

○新谷 これについては、教員練習科を卒業された方一人一人について調査をしないといけないと思いますが、小学校の教員の資格を持っていることが、まず最低限の条件としてあったようです。

例えば、ある聞こえる教員がろう者と偶然会って教えることになったが方法がわからない。そこで東京盲啞学校の教員練習科を紹介された。そして、そこに入るために府知事の許可をもらい学んだという人が多くいました。そこで学んだ人たちの背景をひとくくりにすることはできませんが、やはり少なくともろう者と出会ったことがきっかけで教員練習科に入り、そこで学ばれた方が多くいたということは言えると思います。

○今西 二つ目は、なぜ大阪模範盲啞学校は廃校になったのでしょうかという御質問です。

○新谷 当時の大阪府議会で、大阪模範盲啞学校への予算支援の打ち切りが決定したので。その背景にありますのは、先程、髪結い業について説明をしましたが、「聾啞者の自立」というところがあります。聾啞者が自立して生活していくことは、聾啞の子供

を持つ聞こえる親が一番願うことでもあります。それに対して、大阪模範盲啞学校の目的は、聾啞者の模範生を育成し、その卒業生を、将来的に別に建てる予定をしていた盲啞学校の教員として送り込むことでした。ですが、わずか8カ月で廃校になったようです。

つまり、髪結いのような技術を身につければ、聾啞者は自立して生活していけるわけです。しかし、大阪模範盲啞学校は文が書けることを優先し、技術を身につけることは後回しにしていたのです。つまり、「聾啞者の自立」という考えに矛盾している教育方針だったことが一因でした。

○今西 今の髪結い業について一つ質問です。ろうの御両親を持っておられる方は、職業は床屋をされている方が多いと見受けられるのですが、他の専門の仕事は当時なかったのでしょうか。

○新谷 絵画の仕事に携わっている方々がおられました。京都の大丸百貨店に非常に優秀な聾啞者がいたというのは聞いています。また、聞いた話なのですが、祇園に聾啞者が多くいたようです。飲食店などで処分される食料を盗って、それをグループの聞こえるボスに渡すと褒めてもらえ、わずかな取り分を貰える、といった集団があったそうです。要は聾啞者にとって、仕事の選択が手を使う仕事と限定的だったということですね。今後、更に調査をしたいと思っております。

○今西 皆様からは、まだまだ興味深い御質問をたくさんいただいているのですが、申し訳ございませんが、時間の関係上終了させていただきます。新谷先生、非常に楽しい対談をありがとうございました。

## 【第二部】「日本手話を楽しもう」

講師：小北 悦子

○オストハイダ 只今より、ワークショップを始めたいと思います。

講師は小北悦子先生です。本日はお越しいただきありがとうございます。

先生は群馬県出身で、2012年、ナチュラルアプローチ手話教授法の講座を修了され、2013年から4年間関西学院大学教育学部で非常勤講師として手話を教えていらっしゃいました。

現在は、関西日本手話研究会事務局に携わっていらっしゃいます。それではよろしくお願ひします。

(ワークショップ)

○小北 これワークショップは終了となります。本日は、「形を伝える」というテーマで行いましたが、皆様いかがでしたでしょうか。難しかったですか。形を伝える時、「CL」というものを使います。「CL」とは何かというと、物の形、材質、大きさなどを表すことをいいます。

日本語の場合、例えば小さな動物を数える時、どういう数え方をしますか。「匹」ですね。一方、大きな動物を数える時は「頭」という単位を使いますよね。聞こえる方の頭の中には、そのような「匹」や「頭」の区別があります。手話の場合は、それが「CL」ということです。

この「CL」ですが、例えば物の形を伝えるのは、手だけを使って表すではありません。例えば、「堅い」「柔らかい」といった材質を表す時には、顔の表情がこれを表す文法になります。「細い」という場合は、目を細め頬をすぼめて表します。「太い」という場合は、頬を膨らませて表すことが必要です。顔の部分にも手話の文法があります。

他にも、日本語の場合は、「本を並べる」という表現だけで問題ありませんが、手話の場合は具体的な説明が必要になります。実際に並んでいる様子を見て、横に並んでいるのか、積み上げられているのか、具体的な表現を使って表すことが必要になります。

す。これが手話の魅力だと思っています。ぜひ手話に興味を持って勉強していただくとうれしいです。

何か質問はありますか。

○質問者 このようなワークショップに初めて参加しました。今までNHKの「みんなの手話」という番組を見て、独学でずっと勉強してきたのですが、「名前」という表現が番組内ではこう表されていましたが（名前の手話）、本日教えていただいた手話と違っていたので、最初とまどいました。

○小北 「名前」という表現ですけれども、NHKの場合は東京で作成されている番組になりますので、東京の手話が使われています。

東京の場合、名前はこう表します。（関東での「名前」の手話）

関西の場合、名前はほとんどこういう形で表します。（関西での「名前」の手話）

どちらを使っていたいただいてもいいのですが、もし関西にお住まいであれば、関西の「名前」という表現を覚えていただいたほうが良いと思います。

他に御質問はないでしょうか。それでは、本日はこれで終了したいと思います。皆様、ありがとうございました。

○オストハイダ 小北先生どうもありがとうございました。皆様、御参加いただきありがとうございました。

## 閉会の辞

山本 雅代

○山本 山本です。

本日は、非常に興味深いお話を聞かせていただきました。私は、今西先生がされている研究とは内容が少し違いますけれども、やはり言語についての研究をしておりますので、本日のお話は非常に興味深いものがありました。自然発生的な言語という観点からすると、新谷先生がおっしゃるとおり、疑問に思うところがたくさんあるので、アメリカのウィリアム・ストーキー博士がどう考えていらっしゃるかなと思いながら、先程のフランスでもどういう考え方をしているかを合わせて見ると、手話を使っている御本人たちの中から自然発生的に出てきたのだろうと考えるのが、何となく自然な感じがとてもしています。それを今度、先程おっしゃったように何か根拠のあるデータをもとに、これから研究を進めていただければ面白いのではないかと思います。

本日の講話会はこれで終了となります。いつも、このような講話会などで手話通訳してくださる方々、要約筆記の方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。

これからもこのような催しをどんどん続けていきたいと思いますので、また御案内が行きましたらぜひ御参加ください。本日はありがとうございました。



## 登壇者紹介

- まつおか かつひさ (関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員)  
しんたに よしひろ (近畿聾史研究グループ代表)  
いまにし ゆうすけ (関西学院大学総合政策学部助教／手話言語研究センター研究員)  
こぎた えつこ (元関西学院大学非常勤講師／関西日本手話研究会)  
やまもと まさよ (関西学院大学国際学部教授／手話言語研究センター長)  
オストハイダ テーヤ (関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター研究員)

□当報告書は、2017年7月23日に関西学院大学大阪梅田キャンパスで開催された手話言語研究センター講話会の内容を再現したものである。

#### 手話言語研究センター講話会

---

開催日時 2017年7月23日 13:30～16:30

開催場所 関西学院大学大阪梅田キャンパス

主催 関西学院大学手話言語研究センター

---

#### 手話言語研究センター講話会報告書

---

2018年2月26日発行

編集 関西学院大学手話言語研究センター

発行 関西学院大学手話言語研究センター

〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町1-155

電話 0798-54-7013

FAX 0798-54-7014

---